

---

# 僕と六大始祖の学園記録

絃城恭介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕と六大始祖の学園記録

### 【Nコード】

N2478Z

### 【作者名】

絃城恭介

### 【あらすじ】

少年は過去にとある女性に指導された。そしてまた、彼は何の因果か六大始祖として名を馳せた彼女を召喚する。

これは、そんな少年と女性のハートフル（笑）ストーリー  
戦いも勉強もライバルも二人なら大丈夫！

タイトルは『僕オレと六大始祖アネの学園記録』になります。



## プロローグ・召喚（前書き）

現在『オリジンブラッド・イモータル』は別サイトにて掲載するの  
でこちらから削除させていただいております。

それにあたって新作『僕と六大始祖の学園記録』を新連載する所存  
であります。

今までは一人称で書くことを避けてきましたが、この作品は本当の  
意味で書きたいと思っていますので、どうかよろしく願います。

感想、一言、とにかくなんでもお待ちしております。

## プロローグ・召喚

「この儀式を成功させて、今まで僕に正当な評価を与えなかった奴らを見返してやるんだ」

とある住宅街に存在する、一軒家に存在する空気の冷え切った地下室で、僕は小さく呟いた。

何故そんなところに居るのかと問われれば、ここが僕の自宅にある実験室……のような所だとしかいいえない。

「でも、今回だけは間違いなく成功するはずさ。何故なら……爺が隠し持ってた魔道書があるからさ」

そして、僕は魔方陣に自分の出せる分の魔力をありったけ注ぎ込んだ。

……注ぎ込んだ。

……注ぎ込んだ。

「失敗……だつて？ いや そんなはずは……」

いくら古い術式だとしても、あの爺が隠し持っていたほどの魔道書を使ってまで失敗するまで僕は才能がないわけではない。

「たかだか人間霊の使役なんて、使い魔の召喚と同じかそれ以下の技術だろ……どうしてこの僕がそんな作業を失敗するんだよ」

だとしたら、失敗をするはずなんてないのだ。

もう一度、ありったけの注ぎ込めるだけの魔力を注ごうとしたとき、小さな爆発が魔方陣上に発生し、魔力を注ごうとしていた僕は

それに巻き込まれ、壁に思いっきり頭をぶつけた。

「はがぁもっ……………!?!」

僕は壁にぶつけた頭を労わるように摩りながら、爆発の起きた魔方陣に目をやる。

「いたたたた……………これでも物理戦闘だけなら評定はAランク超えるんだけどな」

そもそも魔術を習う身だと言うのにもかかわらず何故か、僕ことの代わりに、一番必要な魔術ランクの評価が極端に低いのだ。

それはそれとして、魔法陣上に発生した爆発の煙が晴れると、そこには何かの生き物が立って……………はいない。おそらく何らかの失敗によって召喚が完全に成功しなかったようで、胡坐をかきながら、片手で頭をわしわしと搔いている。あの生き物は

髪が燃えるような朱色をしていて、それなりに短くカットされている。

背は僕より遥かに高くて180センチ前後はあるだろう。

子供っぽい……………とは口が裂けてもいえないような体格をして入るが、どこからどう見ても人間で、間違いなく女性である。

端正な顔立ちで、随分人懐っこさそうな目をしている。

それどころか、既にすたすたとその足を動かして僕に近づいてきている。しかも、その顔には美しい笑顔しか見つけることができない。

これが、爺の魔道書に記されていた人間霊……………でいいのか？

いや、まだ確定はしていない。

僕は何事も失敗だけはしたくない。まずは、挨拶を兼ねた確認からするべきだろう。

「き、君が僕に召喚された人間霊……でいいんだよね？」

僕はにこつと笑って、少し緊張感を隠し切れないままに尋ねた。

「ええ、ワタシをあの忌々しい爺の封印から解き放ってくれたのは貴方であっているわよ。洗ちゃん」

あれ……懐かしい声だ

「え…洗ちゃんって……もしかして」

嫌な予感が背中を駆け巡り、冷や汗が背中を伝って気持ち悪い。

「そ、昔に貴方の教育係として召喚された、ワ・タ・シ」

どうして気が付けなかったのだろうか。

「教育悪魔

天音<sup>あまね</sup>……姉さん」

訂正しよう……あの爺が隠し持っていた魔道書は、隠し持っていたのではなく封印していたのだと。

「でも……おつかしいわねえ。なんか、洗ちゃんとパスが繋がってるんだけどこれってどういうことなの？」

天音姉さんはそこで再び胡坐を組むと、ほっぺに手を付けて僕に向かつて不思議そうに呟く。

「パス……？ も、もしかして」





せ何なのおおおおお！

僕はうづくまって身悶えた。

正直、ちよつとだけ涙が零れ出てきた。な、泣いてなんかないんだからな！

これが、僕と天音姉さんの使い魔契約の成立シーンだった。

くすぐりによって引き攣ってしまった腹筋に加えて、召喚の際に持っていたかれた魔力もあつてか、僕の身体はいろんな意味でボロボロだった。

おそらくそのせいもあつてか、姉さんは昔と比べてもそれなりにソフトな接し方になっていた。

「ええつと。そういえば姉さんってどうして爺に封印されたんだっけ……」

だから、昔の教師と教え子（笑）の状況よりはいくらかマシな関係に……そもそも使い魔契約をしたにも関わらず姉さんは自由気まますぎる。

「えー、洗ちゃん忘れちゃったの？ お姉ちゃんあんなに洗ちゃんのこと愛してたのに」

「は？ え？ な、な、何のことだよ！？」

もう何のことだか覚えてないし……なんか思い出してみても碌な思い出がない。



僕の喚く様な声に、姉さんは馬鹿にするようにニヤケながら答える。

「だから、先刻さつきも言ったけどパスが通ってるでしょ。洗ちゃんも意識を集中してワタシのことを考えれば少しくらいならワタシの考えていることも分かると思うわよ」

忘れていた……さっきまで散々自分で考えていた重要なことを。そうなのだ。僕こと今神洗と教育悪魔天音は何の因果が契約してしまったのだ。

「えっと、それと洗ちゃん。その『僕』って言う一人称気持ち悪いわよ」

そして何度も言うが、姉さんは僕の専属の教育悪魔だった。

「べ、別に良いだろ……あの頃とは違うんだからさ」

だから、例え言葉にして拒否しようとも……身体が言う事を聞いてくれない。

「えー、せめてお姉ちゃんの前だけでも昔みたいに『俺』って一人称にしてくれると嬉しいんだけどなあ」

「あ、ね、姉さん……また誘惑チャームの魔眼使いやがったな!？」

「ふふ、教え子は教育者の言う事を聞くものよ」

勝利したような満面の笑顔を浮かべながら、姉さんは僕に絡みつくように抱きつく。

どうやら、そのときの僕は俗に言う、キレて、しまった状態にな

ったのだろっ

「くそ、馬鹿にしゃがって！ 契約者に命ずる、僕を、俺をからかうなあああああ！」

だから成功したのかもしれない。

「えっ、嘘……契約の強制執行が」

初めて行使する、マスターとしての従者に対する絶対の威力を持つ強制執行が。

「ど、どうだ！ これで姉さんも俺に逆らえないだろ！ へへっ、俺にだってできるんだ」

だが、どうやら僕は強制執行の成功に浮かれていたようだ。だから本当の意味での敗北に気付くことができなかった。

「でも、洗ちゃん？」

「な、なんだよ」

「ふふ、一人称が『僕』から『俺』になったわよ」

「え、どうして……確かに俺の強制執行は成功　ね、姉さん……まさか、誘惑の魔眼を解除しなかったのか！？」

そこで姉さんは今まで笑いを堪えていたかのようににんまり笑うと、こう言った。

「確かに強制執行は発動して、からかうことはできなくなったけどお、誘惑の魔眼の効果の使用禁止までは言われなかったからね！。ちなみに残念だけど、洗ちゃんはワタシの前で『俺』っていうこと

しかできないからね」

「な、んな……」

「それと、強制執行の同時許容は最大三個までだからよく考えて使うこと。分かったかな洗ちゃん？」

「どうやら……俺は、永遠に姉さんには勝てそうにありません。」

でも、同時にこれで良かったのかもしれないと思う。なんせまだまだ未熟な俺を姉さんにまた、世話を焼いてくれるといっているのだから。

「なーんか照れちゃうな……じゃあ改めてよろしくね、マスター」

顔を少しだけ赤らめて、姉さんは俺に手を出す。

俺はその手をつしりと掴み、少し上にある顔を見上げて言う。  
言おうとした……

「よろし」

「ああ、言い忘れていたけど召喚されたのはワタシを含めて二人と一匹だから」

そんな突然のカミングアウトに俺は耳をついつい疑ってしまった。

ワタシを含めて二人と一匹？　じゃあ、残りの一人と一匹ってのはどこに……

「あら、本当に気付いてなかったのね。まあ、ワタシの従者として召喚されたわけだから気付かなくても仕方ないか」

俺の考えていることに対して簡単に答えを述べてから、姉さんは指を弾く。

その音に反応するように、今まで何も存在していなかった空間に

一人と一匹の虚像が現れる。それは次第に実体化してくると、俺よりも少し年下くらいの少年とトカゲに羽の生えたような形をした生物が出現した。

「少年って……洗ちゃんも失礼ね。この娘はバステトのテト、こっちのこの子が龍王の子供のキュリオス」

「バステトって…日本で言う猫又のことだよな？ それに龍王って

」

「テトはエジプトの女神の末裔ってだけだから女神でも妖怪でもない純粋な人間よ。それに、龍王って言っても旧世界の龍王だから成長しても大して強くはならないから安心して」

そう言っただけで姉さんは微笑むと、近くにいたキュリオスを俺の頭の上に乗せる。

「あの、姉さん……一体なにをして……？」

そう疑問を口にしたとき、先ほどまで一言も話さずに黙っていたバステトのテトが口を開いた。

「どーしてテトがアンタみたいな人間に使役されないといけないんですか！？ そもそも胸があんまりないってだけで少年ってどういうことですか！ テトは女の子ですよ」

「はいはい。いい子だから静かにしてなさいテト」

「天音様、テトは納得いきません。だってあの爺の息子ですよ！ 絶対に信用できませんよお」

酷い言われように心が折れそうです。

もっとも、流石に年下の子供に馬鹿にされたところで俺の自尊心は……自尊心は絶対に揺るがない……と思う。

「まあ、ワタシの任意で召喚と返還はできるから安心していいわよ」  
「出来る事ならその娘とはあんまり関わりたくないです姉さん」  
「そうねえ、洸ちゃんに毎日魔力切れを起こされるのも嫌だし……  
極力召喚しないことにするわね。テト、キュリ、戻りなさい」

姉さんが再び指を弾くと、逆再生されるようにテトとキュリオスの姿が消えていく。

「テトは絶ええええ対にアンタのことなんてマスターなんて思わないですからね！ キュリちゃんもそうですよね？」  
「キュ？」

テトの言葉にキュリオスは首を少し傾げたと思うと、二人の姿は完全に消えてしまった。

「さあて、洸ちゃん。あの爺はまだこの屋敷にいるの？」

姉さんはそれを確認した後、数秒の間もなく尋ねてくる。

俺はその問いに対して首を縦に振ると、途端に歓喜に満ち溢れたような声で宣言した。

「ブツ血KILLわよ〜」

「ね、姉さん!？」

その後、俺は姉さんに引き摺られながら陰気な地下室から連れ出され、姉さんを封印していた張本人である爺の部屋まで連行されたのは言うまでもないだろう。

俺は思った。姉さんは人をいたぶっているときに一番輝く悪魔<sup>ひつ</sup>なのだ。

「な、洗！ 何故コイツがコッチの世界に召喚されている　　ぎ  
やひいいいい」

「おらあ！ よくもワタシを封印なんてしてくれたな爺イ！」

「おほお、そ、そこは　　」

我ながら凄い従者を召喚したものだと思う。

最強にして最凶……間違いない切り札ジョーカーとしては申し分ない従者だ  
とっておこづ。

（けど……明日から学園に通うのが激しく鬱鬱を感じるような感じな  
いような……微妙な気分だ　　）



## プロローグ・登校

と言うわけで、翌日、当然のごとく通学中の俺の隣には姉さんが並んで歩いていていた。

別に不満があるわけではない。姉さんは従者として最高ランクの従者に当たる‘始祖の悪魔’に格付けのされるほど実力者である。

それに比べて俺ときたら、魔術を学ぶ身でありながら体術ばかり上達しているという現状である。おおよそ人間の到達することのできる最高のランクまで体術だけは昇華させた。だけど、それじゃダメなんだ。

別に武道の達人になりたい訳ではなかった。本当は魔道を極めたかった。

しかし、俺は魔道師に至ることはできずに魔術師止まり。他の人間より優れている事と言ったら体術だけと来た。

魔術師は決して魔道師に勝つことはない。この世の中に広がる常識のような言葉。

だからこそ俺は、一人の魔術師としてその常識を覆したい。

「だからこそ、俺は正当な評価を与えなかった奴らを見返してやるんだ……」

「確かにその決意は立派だと思うけど、社会の窓が全開よ……洗ちやん」

けど、それよりも先にこの恥ずかしい出来事を現実から消し去りたい。

「べ、べ、別に知ってたからな！」

俺は急いで全開になっているズボンのチャックを閉める。

「はいはい、分かってるわよ……。それにしても長い坂道ねえ」

姉さんはそんな俺の言葉を華麗にスルーしながら、通学路である、通称‘魔道師殺しの坂’を見据える。

「なんたって、通称が‘魔術師殺しの坂’だからね」

何故この通称で呼ばれているのかといえは、答えは単純なことがある。魔道師には出来て、魔術師には出来ないことがあるからだ。

それは飛行魔術である。

魔道師の第一歩として試されることが、この通学路にある坂道を飛行魔術で楽々通学することである。

入学式の時には既に優劣がはっきり分かるという鬼畜な通学路であるとすることはつい最近知ったことだった。

「そういえば洗ちゃんって飛行魔術が苦手だったねー……」

「俺は姉さんみたいに何でも出来る人とは違うんだよ」

昔のことを思い出しながらと言った風に呟く姉さんに対して、俺は八つ当たり気味に言葉を返す。

「あら、ワタシだって、始祖の悪魔’に数えられる前は洗ちゃん位にしか魔術は使えなかったし、もしかしたら洗ちゃんよりも弱かったのよ」

それに対して姉さんは空に流れる雲のように、自由気ままな感じで答えた。

正直、俺には一生かかっても出来ない生き方だと思う。それに、稀に羨ましいとも思っていた。

「嫌味にしか聞こえないよ……姉さんがそれを言うのはさ」

だから俺は少し拗ねた様に言葉を返すことしか出来なかった。

「ま、冴ちゃんはワタシを召喚して従者にしたんだから自身を持ちなさいな。そうじゃないと従者として一生、冴ちゃんのことを主だと思っ日が来なくなっちゃうから」

そんなこんなで俺と姉さんは約三十分後に校舎に到着した。

ちなみに本当に余談ではあるが、この学園には学年に五つのクラスが存在する。

A組、魔法使いに属する生徒が集まるクラスである。

B～D組、主に魔道師に属する生徒が集まったクラスである。

E組、魔道師にすら至ることのできなかつた生徒の集まったクラスである。

つまり、何が言いたいのかと言つと……、俺はE組の住人であるということだ。

そんなクラスが一番後ろにある窓際の席が俺の席である。

「お、今日はお前が二番か冴……。つて、お前の隣にいる綺麗なお姉さんは誰だよ？」

そして、たった今声をかけてきた陽気な男は笹宮凧ささみやなづなである。

クラス内での呼び名はナギだ。

「よ、おはようナギ。この人は昔、俺の専属の教育悪魔だった天音姉さん。で、今は何の因果か俺の従者になった」

「は？ 天音って、あの『六大始祖』の一角の天音か？」

ナギの冗談だろというような驚きの口調に、俺が答えるよりも先に姉さんは口を開いていた。

正直な話、これが俺と姉さんの学園記録の始まりだったのかもしれない。

「ふふ、よく知っているわね。お姉さん嬉しいなあ」

姉さんの言葉に、ナギはわなわなと身体を震わせながら小さく呟く。

「…これで……」

その声は聞こえるか聞こえないか微妙な大きさの声だったが、次第に大声に変わっていた。

「魔術師が魔道師劣るっていう理屈は覆せるぜ！」

その声は教室だけではなく、学園中に聞こえるほどに大きな声だった……のだと思う。

だから集まってくるのだ。格下のものを馬鹿にする嫌味な連中が。

「へえ、落ち零れのE組の生徒が何を騒いでいるかと思えば……」

「魔術師が魔道師に勝つ？ とんだ笑い話に過ぎないよ」

そんなことを好き勝手に言いながらE組までわざわざ来た人物は、魔道師学級の中でも上位魔道師に位置するB組の中でも有名なウザさを誇る鳴神兄弟だった。

もちろん、そんな安い挑発にナギが食って掛からないわけではない訳で……

「はん、お前らみたいな魔道師なんて血統に物を言わせた親の権威を振りかざしてる哀れな人間じゃねーか」

その言葉を待っていたといわんばかりに鳴神兄弟の目がいつもの如くきらりと光るのだ。

「じゃあ、校則に則って決闘でけりをつけようじゃないか。魔術師」  
「やってやるよ、俺の代わりにこいつがよ！」

その瞬間、俺の背中にナギの掌が打ち付けられた。

………打ち付けられた？

「………は？ 何で俺が決闘なんてしないとイケないんだよ！？」

しばしの思考停止の後、俺はナギに怒鳴るように言い返す。

「えー、お姉さんも洗ちゃんも成長振りを少し見たいなあ」

「何を人事みたいに言ってるんだよ姉さん！？」

だが、それに対して言葉を返したのは姉さんで、あまつさえとんでもない事を言ってくれた。

「だって、そこの二人って私から見れば洗ちゃんより実力は下よ？」  
「なっ、何言って」

そんなこと言ったら本気で俺が魔道師二人と戦うことに……

「へえ、君の従者は随分と面白いことを言うね……。決めたよ、君には僕たち二人から正式に決闘を申し込むよ。それで思い知ると良  
いさ、自分の従者がどれだけ無知なことを言ってしまったのだとね」

二人の声が重なって聞こえた。

「なつ、待ってくれよ。気を悪くしたなら謝るからさ、な？」

「いいや、常々思っていたんだ。この学園に魔術師なんて存在を教  
育させるような金を使わせるのは勿体無いつてさ」

俺の言葉は結局、鳴神兄弟に聞き入れては貰えなかった。

時既に遅し。いや、この場合は覆水盆に返らずの意味のほうがど  
ちらかと言えば合っている気がする。

そもそも、とぼっちりもいいところだ。本人の意思に関係なく、  
勝手に決闘を申し込まれるなんて……。

「そんなに落ち込むことないでしょ、洗ちゃん」

そんな極度に落ち込んだ俺の背中を、姉さんはバシッと一回強く  
叩く。

「だけど、返す言葉が何一つ思い浮かんでこなかった。

「ま、洗。俺はお前が勝つって信じてるからよ」

いい笑顔で親指を立てているナギの指を見て、俺は力なく呟く。

「なんだ、その指をへし折ればいいのか？」

そもそも、絶対に姉さんは決闘の意味を分かっていない。

この学園における決闘では、勝者は敗者への強制執行権利を契約書<sup>1</sup>によって奪い取ることが出来る。ギアスベ

酷い場合は即刻自害を要求されたりと様々合ったらしいが、今は契約書規定によって最低限の人権と生命活動を守られているが、それでも従者に対する強制執行とは異なつて、対象者に対する拒否権は与えられない。

つまり、契約書が存在する限り脅えながら生活をしなければならぬということになるのだ。

それをよりにもよつて、あの鳴神兄弟二人に決闘を申し込まれるなんて……

「たぶん、あの学園長は笑いながら許可を出すんだろうな……激しく鬱だ」

再び小さく呟くと、姉さんが俺の肩に手をポンと乗せるように何回か叩いた。

「大丈夫、いざとなつたらお姉さんが助けてあげるから」

「つまり、それまでは自力で死ぬ気で戦えと？」

否定して欲しかった。

けど、姉さんはサディスティックな笑みを浮かべて頷いた。

「そ、いざとなつたらね」

「強制執行を使って無理矢理戦つてもら」

そこまで言いかけたところで姉さんは妖艶な笑みで答えた。

「洸ちゃんの魔力じゃそこまでは無理よお。ふふ、とりあえず頑張ってみれば良いじゃないの」

俺は返す言葉を完全に失い、茫然自失のまま姉さんの言葉に頷くことしかできなかった。

「ま、俺も応援には行くから安心しろって」

その時の俺はまだ、本当の意味で姉さんの主にはなれてなんかいなかったんだ。

今だからこそ言える。

姉さんは俺のことをいつでも一番大事に思ってくれていたんだって。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2478z/>

---

僕と六大始祖の学園記録

2011年12月11日15時51分発行